

嵐の後

駅をひとつ通り過ぎたわずかの間に
空の炎色反応は終わっていた
銀河のような雲が腕を広げ
僕の頭上を越えて遠く
東へと急いでいた

静かな対話が行われている
嵐は古ぼけた情熱を担いで行ってしまった
既に闇まで眠りに就こうとしている
人間たちが群れ成す地上では
この僕が冷め切った歩みを続けている

踵を返すか
それとも追いつがって運ばれるまま
放物線の軌跡を残すだけの浮遊物となるか
さてはまた
真に快楽的な暴力を揮うか

ああ、あの海と番った空は
そのとき、いかなる欲望を満たしたか
雲散霧消してしまうもの
そんなものなど存在しなければいい
永遠に僕に纏わり続けるがいい

ああ、遥かなるデクレッシェンドよ
永遠に僕のもとにあれ

(2001.9.11)